様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１９５

研究課題名（和文）帝国キネマ演芸の総合的研究ーー映画史、地域関係史、国際交流史の視点から

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Teikoku Kinema Engei (Imperial Kinema Entertainment Co.) in 1920-1931

研究代表者
笹川　慶子（SASAGAWA, Keiko）

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：３０３３９６４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、大阪最大の映画会社であった帝国キネマ演芸が、戦前期を代表する大映画会社のひとつであること、松竹など大正末期の新会社と同じ志を抱いて海外展開を図っていたこと、東日本と比べ西日本では絶大な人気を誇っていたこと、日本映画産業の近代化に大きな役割を果たしていたことがわかった。しかし同時に、これまでほとんど包括的に検証されてこなかった帝キネの活動の全体像を明らかにするには、大阪と西日本、あるいは日本、あるいはアジアや欧米を含むグローバルな視点から帝国キネマ演芸の活動を捉え直す必要があることもわかった。

研究成果の概要（英文）：This research has shown that Teikoku Kinema Engei (Imperial Kinema Entertainment Co.) was not only the largest movie company in Osaka, but also one of the representative movie companies of Japan before the war; launching out into foreign markets with the same spirit and ambitions with Shochiku and other new companies at the end of the Taisho Era; phenomenally more popular in western Japan than in eastern Japan; and playing a large role in modernizing the movie industry of the nation. It has also made it clear, however, that the activities of Teikoku Kinema Engei should be re-examined not only in local and national terms, but also in global terms, in relation to Osaka, western Japan, the whole of Japan, Asia, or Europe and the U.S., in order to get the entire picture of its activities, which have hardly been reviewed comprehensively.

研究分野：日本映画史

キーワード：帝国キネマ演芸　山川吉太郎　大阪映画史　朝鮮映画史　映画興行　映画製作　映画館　天活

１．研究開始当初の背景

戦前の日本における映画会社に関する歴史的研究といえば東京と京都が中心で、大阪の映画会社についてはこれまでほとんど調べられてこなかったが、例外的に帝キネだけは、わずかながら研究されてきた。とくに重要な研究としては1988年から1998年までに東大阪市が市史紀要として発行した、森杉夫著『帝国キネマの興亡（一)』、北崎豊二著『大正末期の帝国キネマ――帝国キネマの興亡（二)』、宇田正著『昭和初期の帝国キネマ――帝国キネマの興亡（三･完)』の 3 著作があげられる。

しかしながら、それらの研究は歴史系研究者によるものの、その紙面の大半は映画雑誌『キネマ旬報』に掲載された帝キネ作品の紹介文や批評文の抜粋が年代順に転載されているにすぎない。帝キネの説明についても、田中純一郎著『日本映画発達史』に叙述された映画史に依拠しながら、そこに柴田勝著『天活･帝キネ 小坂・長瀬撮影所の記録』や新聞報道されたいわゆる「帝キネ騒動」の情報を加えたにすぎず、日本映画史における帝キネの存在を相対的に検証することはできない。また帝キネが大阪という都市、あるいは関西／関西以外の地域、あるいは世界においてどういった存在だったのか、その歴史的意義も見えてこない。

逆にいうと、帝キネの歴史を同時代の大阪、あるいは関西／関西以外の地域、そして世界の映画製作システムのなかで相対化することで、はじめて帝キネの存在意義が明らかになる。帝キネとは一体どのような存在だったのかが見えてくる。

帝キネの存在意義を明らかにするには当然ながら映画会社の製作面だけではなく、配給や興行面にも光をあてて総合的に考える必要がある。これまでの映画研究は映画の製作面に注目が集まり、配給や興行面が体系的に論じられることが少なかった。そのため映画言説の多くは大きな映画会社の撮影所が集まる東京と京都に集中し、大阪は断片的にしか語られてこなかった。それは大阪には帝キネ以外ほとんど名の通った映画製作会社がなく、かつその帝キネも 10 年ほどで消滅してしまったからである。

とはいえ昨今、日本の映画研究でも映画の配給や興行の研究が盛んになりつつある。申請者も 2011 年度は集中的にこのテーマに取り組み、すでに①「折鶴お千と道頓堀興行」（藤木秀朗編著『観客へのアプローチ』森話社、2011 年所収)、②「大阪映画文化の誕生――都市の変容と映画館」（大阪都市遺産研究センター編『大阪時事新報記事目録 文芸と映画編 昭和Ⅰ』関西大学出版部、2011 年所収)、③「大阪映画産業論序説――阪妻と京都、そして大阪」（大阪都市遺産研究センター編『大阪都市遺産研究』第一号、大阪都市遺産研究センター、2011 年所収）の論文を発表し、闇に埋もれてきた大阪の映画興行史の一端を明らかにしてきた。

今後さらに大阪映画産業史の全貌解明に近づくためには、これまで見過ごされてきた帝キネの活動を大阪の映画製作および配給／興行史の両面から捉え、それをさらに映画史、地域関係史、国際交流史の文脈において再考することが必要不可欠であった。

２．研究の目的

まずは、帝キネという会社の活動を可能な限り詳細に明らかにする。おもに草創期、興隆期、衰退期に分けて考察する。ただし、これまでのように東京中心の映画史叙述のなかに帝キネの説明をはめ込むというのではなく、あくまで地域に密着した資料および情報を中心に収集し、そこから浮かびあがる新たな帝キネ像を構築する。

次に、映画が渡来した明治末年から 1931 年までの約 30 年の間の大阪には一体どのような映画会社が存在し、どういった活動をしていたのかを同時代の資料を駆使して明らかにし、これらの会社と帝キネとの関係を解析する。

続いて、帝キネと大阪以外の関西圏所在の映画会社との関係を調査分析し、帝キネをより広い文脈において捉えなおす。具体的には京都や奈良、兵庫など大阪に隣接する府県において活動していた製作会社がどのような活動をしていたのか、それらの製作会社と帝キネはどういった関係を取り結んでいたのかを分析する。また、東京など関西以外の地域で帝キネがどのような活動をしていたのかも明らかにする。

最後に、帝キネが海外の映画会社とどう交流していたのか、あるいはどういった関係を取り結ぼうとしていたのかについて検証し、帝キネの歴史を世界の映画産業の動きのなかで捉えなおす。

以上の調査分析をふまえて、戦前期を代表する大映画会社のひとつである帝キネを、大阪、関西、日本、そして世界地図のなかに位置づけ、その全体像を浮かびあがらせる。

３．研究の方法

平成 24 年度は帝キネの活動を明らかにし、その活動を大阪の映画産業史のなかで捉えなおす。平成 25 年度以降は 24 年度の調査分析結果を踏まえ、帝キネ演芸の活動を大阪以外の地域――京都や奈良、兵庫といった関西圏、東京など関西以外の地域、欧米およびアジアなど海外の映画産業との関係において再考する。具体的には以下の手順で研究を行った。

〇平成 24 年度

（１）明治末年から 1931 年までに大阪および京都、奈良、兵庫に存在していた映画会社を調査し、リスト化する。

（２）『活動写真界』や『キネマ旬報』な

ど明治末年から 1931 年までに刊行され、現存する映画雑誌を網羅的に調べ、帝キネおよびそのほかの大阪に存在した映画会社に関する情報を可能な限り多く収集し、大阪映画産業史のアーカイヴ構築のための基礎データを蓄積する。

（３）『大阪時事新報』など大阪発行の地元新聞を調査し、帝キネおよびそのほかの大阪に存在した映画会社に関する情報を可能な限り収集し、大阪映画産業史のアーカイヴ構築のための基礎データを蓄積する。

（４）大阪府公文書館、大阪市市史編纂所、大阪府立図書館、大阪市立図書館など郷土資料を所有する研究機関や図書館において情報を収集する。

（５）大阪近郊に在住する映画資料のコレクターに資料の閲覧を申し込むとともに、大阪における映画製作に関する情報をインタビューする。

（６）『キネマ旬報』『大阪時事新報』などの資料に基づいて帝キネ作品をデータベース化し、作品の傾向を分析する。

（７）（１）から（６）の調査分析結果を踏まえ、その成果を研究論文として発表する。

（８）帝キネがハリウッドと交流をもっていたことはすでに判明しており、その交流の実態を明らかにするべく、アメリカの大学附属図書館および公共図書館にて調査及び資料収集をする。

○平成 25 年度

（９）京都や奈良、兵庫に存在が確認されている映画会社と、帝キネとの関係を明らかにする。とりわけ映画の製作や興行の方針の違いに注目し、それによって帝キネの特徴を一層明確にする。

（１０）東京など関西以外の地域における帝キネの活動を調査し、その活動を同じ年に設立された松竹キネマと比較することにより、帝キネの特徴をより明確にする。

（１１）研究にさらに広がりを持たせるべく、帝キネと海外の映画会社との交流に着目し、そこから帝キネが一体どのように自らを日本国内外において位置づけようとしていたのかを明らかにする。そのためまずは前年度にアメリカで調査収集した資料を分析し、その結果を踏まえて、さらに十分な調査を行うためアメリカ議会図書館にて調査を行う。

（１２）（８）から（１１）の調査分析結果を踏まえ、その成果を論文として発表する。

○平成 26 年度

（１３）（１）から（１２）の調査結果を踏まえて、これまでの研究成果をより広い文脈において捉えなおし、関西、日本、そして世界のなかで帝キネの活動の全体を検証し、その特徴および存在意義を明らかにする。

（１４）研究成果を国内外の研究会や講演会、学会などにおいて積極的に発信する。

４．研究成果

2012 年度から 2014 年度にかけて科学研究費の助成を受けた研究の成果として、戦前の大阪には実は、大小さまざまな撮影所が存在し、たくさんの映画を製作、配給、興行、消費していたことが明らかになった。とくに 1920 年（大正 9 年）に設立された帝キネは、大阪最大の映画製作会社であったというだけでなく、1931 年（昭和 6 年）にそれが消滅するまで、老舗の日本活動写真株式会社（以下、日活）と新進気鋭の松竹キネマ株式会社（以下、松竹）と肩を並べる日本三大映画会社のひとつとして活躍していたことが明確になった。

また、調査を進めていく過程で、同時代の東京在住の文筆家や批評家が抱いていた帝キネに対する否定的イメージ――「大阪特有」、「二流」、「地方」――とは裏腹に、富士山より西の地域では、帝キネの作品とスターが絶大な人気を誇っていたことがわかった。

さらに従来の映画史で帝キネは、大正末期に新しい映画製作を目指して次々と設立された新会社――たとえば国活や松竹、大活――とは異なる類の会社と考えられてきたが、実は帝キネも、同時代的な志をもち、海外市場にも積極的に進出し、他の新会社としのぎを削っていたことが明らかになった。

とくに興味深かった発見は、大阪の盛り場にあった見世物小屋や劇場が、しだいに映画館に変わり、近代的な映画街が形成されていく過程で、帝キネの創設者である山川吉太郎が、非常に重要な役割を果たしていた点である。とりわけ、天然色活動写真の上映を目玉にした千日前楽天地の開場と連鎖劇の流行は山川に負うところが多く、日本における近代的視覚文化の浸透を考える上でも貴重な事例であることがわかった。

しかし、これまでの研究の結果、帝キネの活動をより包括的に、より明確に捉えるには、いくつか新たな調査課題も浮上してきた。

（１）まず、帝国キネマの前身である天然色活動写真株式会社（以下、天活）の大阪支社（以下、天活大阪）の活動を明らかにする必要がでてきた。天活は、日活が日本の映画産業を支配していた時代に、唯一、日活に対抗しうる会社として 1914 年に設立された映画会社である。天活では、天活東京と天活大阪の二つの会社が、それぞれ東日本と西日本の市場を分割支配していた。その天活の創設に尽力し、天活大阪の代表を務めていたのが、のちに帝キネを創設する山川吉太郎である。この天活東京と天活大阪の関係は、いわゆる本社が支店をコントロールする主従関係ではなく、日本の市場を、富士山を境に東と西に分けて分割管理する姉妹関係に近い。にもかかわらず、従来の映画史研究では、天活東京および小林喜三郎を中心に叙述し、天活大阪および山川も含めた、天活全体の企業活動を公平な視点から把握してこなかった。

（２）次に、日本の旧植民地における天活

大阪および帝キネの事業展開をより包括的に分析する必要がある。これまでの調査により、帝キネは、会社設立の翌年である 1921 年に朝鮮市場への進出を果たし、帝キネの前身である天活大阪も、1910 年代末ごろから朝鮮で映画館を経営していた団成社（ダンソサ）と提携しながら、連鎖劇を製作したり、スタッフの派遣研修をしたりしていたことがわかった。しかし、朝鮮以外の植民地における天活大阪および帝キネの活動に関しては未調査のままである。

（３）天活大阪および帝キネと欧米企業との関係もさらに踏み込んで調査する必要がある。これまでの調査により、よく言われるロシアに加え、天活大阪とイギリスのアーバン社などとの関係も重要であることが明らかになった。従来の日本映画史において、天活とイギリスのアーバン社が開発したキネマカラー技術の関係は、天活東京および小林喜三郎を中心に論じられてきたが、天活大阪の役割の大きさも無視できない。にもかかわらず、天活大阪とアーバン社との関係は、これまでまったく調査されてこなかった。

今回の調査研究により、帝キネの活動をより包括的に、より明確に捉えるためには、上記の３つの問題をさらに深く調査分析する必要があることがわかった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① 笹川慶子「京城における帝国キネマ演芸の興亡――朝鮮映画産業と帝国日本の映画興行」『大阪都市遺産研究』第３号、大阪都市遺産研究センター、2013 年 3 月、19-32 頁。　査読無
DOI: http://hdl.handle.net/10112/7779

② 笹川慶子「映画『わが町』を読む――織田作之助と川島雄三」『織田作之助と大阪』大阪都市遺産研究センター、2013 年 3 月、担当 28-39 頁。(総頁数 1-151 頁)　査読無
DOI: http://hdl.handle.net/10112/7777

〔学会発表〕（計　6　件）

① 笹川慶子「帝国日本の映画事業――朝鮮映画産業の発展と帝国キネマ演芸」東アジア文化交渉学会第 6 回国際学術大会、2014年5月8日　於復旦大学(上海)　査読有

② Keiko Sasagawa, “Film Exhibition Culture in Osaka 1896-1926: The Cultural Geography of Movie Theaters,” Council on East Asian Studies at UC Berkeley Art History Seminar Room, Berkeley (U.S.A.), January 10, 2014.　招待講演

③ Keiko Sasagawa, “Film Exhibition Culture in Osaka 1896-1926: The Cultural Geography of Movie Theaters,” Council on East Asian Studies at Yale University Henry R. Luce Hall, New Haven (U.S.A.), November 18, 2013.　招待講演

④ 笹川慶子「京城における帝国キネマ演芸の興亡――朝鮮映画産業と帝国日本の映画興行」日本映像学会第 39 回大会、2013 年 6 月 1 日　於東京造形大学　査読有

⑤ Keiko Sasagawa, “Silent Films with Popular Music: the Intermediality of Kouta Films, 1896-1929,” Society for Cinema and Media Studies Annual Conference at San Diego (U.S.A.), March 24, 2013.　査読有

⑥ Keiko Sasagawa, “Silent Films with Popular Music: the Intermediality of Kouta Films, 1896-1929,” Society for Cinema and Media Studies Annual Conference at Chicago (U.S.A.), March 8, 2013.　査読有

〔図書〕（計　4　件）

① 笹川慶子、増田周子共編著『大阪の小説家と映画』関西大学大阪都市遺産研究センター、2013 年 3 月、1-254 頁。

② 笹川慶子、安井喜雄「わが映画人生を語る　安井喜雄氏、インタビュー」『大阪に東洋 1 の撮影所があった頃――大正・昭和初期の映画文化を考える』ブレーンセンター、2013 年 3 月、担当 19-106 頁。(総頁数 1-491 頁)

③ 笹川慶子「日本の映画王になれなかった男――山川吉太郎のサクセスと没落」『大阪に東洋 1 の撮影所があった頃――大正・昭和初期の映画文化を考える』ブレーンセンター、2013 年 3 月、担当 107-152 頁。(総頁数 1-491 頁)

④ 笹川慶子「花開く大阪キネマ文化」『大阪に東洋 1 の撮影所があった頃――大正・昭和初期の映画文化を考える』ブレーンセンター、2013 年 3 月、担当 153-215 頁。(総頁数 1-491 頁)

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
笹川　慶子（SASAGAWA, Keiko）
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：30339642

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：